天理図書館蔵「天地始之事」について

―㈠ 善本翻刻篇―

小島幸枝

一　はじめに

写本「天地始之事」が発見されて、[註1]今年（一九六九年）で、優に三十年を経たことになる。が、本写本の特異な性格[註2]のため、研究面では、流れた歳月に見あうだけの発展がみられたとは必ずしもいい難い。これは、一つに写本そのものが稀覯的存在であった為と考える。そこで、本稿より起こして、翻刻、索引の資料篇に加えて、注釈、研究の各篇を物すことにした。

翻刻並びに索引の底本に使ったのは、現存九写本中の白眉である善右衛門本（略して善本）である。写本そのものについては、田北氏の高著があり、[註3]その後、筆者も、二、三拙稿を認めているのでそれを参照されたい。[註4]ここでは紙数の関係上、繰返さない。

尚、本文と註とは、本来、併せ載すべきであるが、紙数節約のため、本稿では、善本本文のみの完全上梓を図った。次稿では全註を物する予定である。併せて参照されんことを乞う。

註1　写本九本中、最も早く発見されたものは助爺本（昭和六・四・一六発見）。発見者田北耕也氏。尚、その後、片岡弥吉氏が、村上近七本、松尾孫蔵本の存在を報告しておられる。（昭42NHKブックスかくれキリシタン）

註2　潜伏キリシタンの秘書

註3　昭和時代の潜伏キリシタン（昭33年第二版日本学術振興会）

註4　天地始之事について　計量国語学第37号
天地始之事の外来語　計量国語学第40号
天地始之事の語彙の周辺　キリシタン文化研究会報　第十一年第二号

二　本文翻刻凡例

一、本稿は、「天地始之事」善本の翻刻である。

一、原写本は、既に田北氏が、高著「昭和時代の潜伏キリシタン」に於て公刊されているが、索引を脱稿するために、新たに本稿を編むもので、その許可を与えられたのは、全く、所蔵者天理図書館のご好意によるものである。

一、本稿における翻刻は、できるだけ原本に忠実であることを原則としたが、外来語に限って傍線を施してこれを示し、多少とも「よみ」の便宜を図った。

例　ばらいそのけらくを

一、翻刻にあたって、一ブロックは、原本一ページの分量そのままとした。行毎の分量も、原本の通りである。

一、原本の丁数は、各ブロック左下に、／を以て示し、アラビア数字で記した。数字のみは、おもてを、「ウ」を付したものは、

該当ページの裏を指すものである。
例　／5（五丁表）　／5ウ（五丁裏）
一、本翻刻中のルビ、及び添え字は、原本通り、あてる（添える）文字の、左側又は、右側に施した。
一、原本に於て、判読不明の箇所（主として磨滅によるもの）は、□印を施し、異本との校合により、補足した。
例　[十]まんの
一、ミセ消チの部分は、文字の左側に、○印を施してこれを示した。　例　遣(つかはす)へしく○
一、文字の書き損じの部分は、■印を以てこれを示した。　例　人■(間)萬もつ
一、本文中、明らかに脱字、誤字と思われるもの、及び、捨て仮名、衍字にも、ママを付してこれを示した。
一、本稿中、（　）の数字は、次稿の註のためのものである。

以上

三　本文翻刻

表紙　白紙　／1

表紙ウラ　白紙　／1ウ

天地始之事

一そも〳〵てうす(一)とうやい奉(ママ)るハ天地
の御あるじ人間萬もつの御おや
にてましま(二)す(三)なり弐百そうの
御くらい(四)四十弐そうの御よそを(五)い
もと御一たいの御ひかりをわけ
させたもふ所す(六)はち日天(七)〳〵それ
より十二天(八)をつくらせたもふ其
なべんぼう(九)此所地ごく(十)〳〵まんぼう(十一)
おりへてんしだいごだい(十二)はつぱ(十三)おろ
はこんすたんちほ(十四)らころてる
[十]まんのはらい(十五)[そ]此所すなはちごくらく

／2

[せか]い(十七)〳〵それより日　月[ほ]しを[御つくら]
す(十八)万のあんじよ(十九)思召すまゝにめし
よせたもふ〳〵七人のあんしよかし
らしゆすへる(二十)百そうのくらい三十
弐そうのかたち(二十一)又天帝(てうす)萬もつ
を御つくりつち水ひかせしを油(あぶら)
御じしん(身)の御こつにくを御入しくだて
るしやくわるたきんたせすたさば
たつかふ一七日めにれんぞくして
これ則(すなはち)人間のごたい(二十二)〳〵天帝より四

ふん(二十三)のいきを御入ありてとめいご
すのあたん(二十四)となつけ三十三のす　／2ウ
かたゝよつてまわりの七日めハ大一の
いわい日(二十五)〳〵又女一人御つくりとめいがす
のゑわとなつけ(二十六)ふうふとなし。ころて
(二十七)るといふかいをへて。男子女子弐人
出生(しゆつしやう)(二十八)しそれゑわあだんてうす
をらいはいいたさんため日〻ばらい
そにおもきけるてうす(ママ)御るす(ま)を
みすましす万のあんじよをたば
かりていわく(二十九)此しゆすへる天帝(てうす)
も同せん(三十)〳〵よつていらいわれを拝(おが)ミ
めされといふこれをきゝてあんじよ
[か]たあら〳〵らい拝(はい)いたす〳〵(三十一)[かゝる所]

／3

にゑわあだんてうす様ハおわし[た]
まわすやといふけれバじゆすへる
きゝもあゑす御主(あるし)ハ御天(ご)〳〵我(三十二)われ
てうすどふせんたるかゆへに(三十三)敷(す)万
のあんしよもわれをそんけう(三十四)ある
よりてゑわあたんも此じゆすへる
をおかミめされといふゑわあ

だんきゝてわれ〳〵ハてうす様を
拝むへしとたがいにろんもやまざる
所にてうす只今下天〳〵と御幸有
ハしゆすへるを拝ミのこりしあんしよ
かたゑわもあだん　はつと斗　／3ウ

にてを合てそふしおかミ則其時
あやまりのことわりくをく　いこん
ちりさん〳〵かくててうすのたまう
ハじゆすへるハ拝むともまさんこのミ
かならすくう事なかれさてゑわ
あだん子ともをつれてきたりなバ
よくなをさつけゑ　せんとなさ
けもふかき御ことバにみな一とふ
にかへりけりしゆすへるこれを
きくゑわあだんをたばかりとらんと
ころてるにいそきけるみちにていた
すまじきまさんのこのミをとり　／4

ゑわあだんかかたゑゆきあだんハ
いつかたゑといふ　ゑわきゝてはらい
ぞの御もんのやく〳〵とこたゆる又じゆ
すへるわれでうすのつかい〳〵其方

子ともよくなをさつけゑさす
へしとの御しやういはや〳〵子ともを
つかわし申せ　いふ　ゑわきいてまこと
とおもいこれハゑんほう御くろうさま
〳〵又其元の御ふくやうせらるゝハ
何しなるやと尋ハしゆすへるこれ
ハまさんこのミといふゑわきいてをど　き
それハはつとの物なるときゝたるか　／4ウ

たへてもよろしくそうろやといふ
じゆすへる大きにいつわりて此まさん
のこのミハてうすや此しゆすへるかもの
なりこれをたへ候得ばみなてうすどふ
せんのくらいになるかゆへにはつと〳〵といふ
ゑわきゝてさようにて候やといふ
ゑわ　しゆすへる　しすましたりと
まさんのこのミをてにわたしこれ
をたへて此じゆすへるくらいに
なりともなられよとすゝむれハゑ
わよろこびおしいたゞきてそしよじ
にけり又じゆすへるこれハあだん　／5

ゑくわすへし子ともいそぎつれ

まいるへしとかへるていにてじゆす
へるハ小かけにかくれうかゝいるかく
てあだんハたちかへれハゑわ右のしだ
いをものがたり。のこしをきたるま
さんのこのミてにわたせハうたかいながら
あだんてにとりこれをたへるかゝる
所にふしぎやてうすハいつくとも
なく御幸にていかにあだんそれハ
あくのミなるにと仰有あだんは
つときやうてんしてはきいださん
とすれとものどにかゝりそのかい　／5ウ

なくあらかなしやゑわもあだん
もたちまちに天のけらくをう
しない其ざますぐにひきかわ
り其時さるへひしなのおらつ所を
つとめ天にさけび地にふしてち
のなみたをながし千くいすれとも其
かいなくとがのおらつ所の始り此時〳〵
やゝありて天帝にむかい我いま
一と何とそばらいぞのけらくを
うけさせたまわれかしとぞね

がいける天帝きこしめされさも
あらハ四百余年のくをく　ハいす　／6

へし其せつはらいそにめくわゆ
る〳〵又ゑわハ中天のいぬとなれ
とけさげられゆ　ゑもしれすなり
にける ゑわの子ともハこれゟした
のけかいにすみちくしやうをしよ
くし月ほしを拜ミくをく　わいして
まいるへし一どハ天のみちをしらす
へしさてけかいにかふじやくといふ
石ありこれを尋てすむときハ
かならすふしぎあるへしこれ則此
かい〳〵いせんにかくれいたるじゆす
へるハはなかくくちひろく　／6ウ

てあしハうるこつのをふりたて
すさましくありさまにて
天帝の御まへにかしこまりわか
悪しんゆへに此さまに相成ゆくさ
きとてもおそろしく何とそば
らいそのけらくをうけさせたま
へとねがいける天帝仰けるハ悪しやう

なるなんち天にわかつてかなわぬ
けかいハゑわの子ともこうく　いゆ
けハこれ又かなわぬよつていかつち
のかみとなれと十そうのくらいを
ゑ中天をぞゆるされける　／7

さてじゆすへる拜ミし安女方
かなしいかなやみなことゞくくてん
くとなり中天にそ下りけり

まさんの悪のミ中天に遣る事

一天帝思召けるハ天もげかいにもあ
たものなれバ中天の天狗の為にぞ
遣したもふさてゑわ　子とも
ハ立別ごうじやくの石ほとりで
ゆきあいかゝる所に天ゟぬき身
おちつらぬきこれぞまへ　／7ウ

かた天帝のふしぎの御しらせ
と両人はつとおどろきて女ハお
もわずもちたる針をなげかけ
むねに打こみちをながし
又男ハくしをなけかけたかいに

た人となりそれゟ女閉口して
ふうふのちきりをなしけり
こいをしゑのとりをみて
あまたの子共をもふけたりこれ
ゟ■次第にいやます人間なれ
バしよくもつもたらざるゆへ天に
むかいてきせいを掛しよくもつ　／8

あたゑたまわれかしとねかい
けれハ天帝こくうに出現ましま
してもみたねをそあたゑたもふ
其たねゆきの中につくる明六月
よくみのり八かぶに八石其うら
九石ぞみのりたり八ほで八石の
田うたのはじめこれ〳〵其のちの山に
ひろまつてひようろうハたくさん
〳〵それより悪心よく心の世■中
となりうんよくとんよくがよく
といふもの三人生じて善人の
しよくもつをおのれがほしい　／8ウ

まゝにぬすみ取かるがゆゑにて
うすこれをにくませたもふに付

三悪人壱躰にとぢ付三めんに
角はゑそのざますさましく田畠
にみのりたるもの己が自儘に
盗取これによつて天帝あま下ら
せたまいてあまへしやぐまとなれ
とうみのそこ江けこませたもふ
此三人の悪とうもみなこれしゆ
すへるのわさ也段〻人おふく
なるにしたかいみなぬすみなら
いよくをはなれず悪にかた　／9

ふく次第に悪事つのるゆへて
うすこれをあわれ身たまいて
はつは丸しといふたいおうに御つう
げぞ有けり此てらのしゝごま
のめあかいろになるときハ津浪
にて世ハめつぼうとの御つうけを
かふむり帝王ハ日ごとにてらゑ
まいるてならい子ともあつまり
みていかゞにてしゝこまハ拝るゝ哉
といゑハわきかた子ともきいて
しゝのめあかいろになる時ハ此
世かいハなみにてめつほうする　／9ウ

わきの子ともきいてわらいて
いふやうハさてもおかしき事ぬり
たらすぐに赤くなるがめつぼう
■■
ハおもいもよらぬとぬりけりはつは
丸じいつものとうりさんけいしし〻
のめあかきをみてハつとお
どろきかねて用意のくりり
船に六人子共をのせあに壱人
ハあしよわくゆへざんねんながらの
こしをくかゝる所にあいだも
なく大なみ天地をおどろ　しへん
じの間にたゝ一めんの大うみに　／10
■時○
そなりけり右の獅子駒うみ
の上をはしりのりおくれたる壱人
のあにせなにおふてぞたすけ
ける其汐三時にさつとひき。あり
おふ嶋にぞやすらひ居る然　所に
おくれしあにをしゝのせおふて
きたりけりなみにおぼれて
しゝたる數万の人〻へんぼうといふ
所前界の地ごく此所におちける

天帝人間を為助御身を分ケさせ給事
一くり船にのりいのちをつきし　／10ウ
七人のものともハ其嶋をすみ所と
さだむといへとも夫婦のきわめなく
ゆへ女ハまゆをおろしはにかね付る
事此時よりはじめ〻又次第に弥増
人間うまれてしするものこと〴〵く
みなへんぼうにそおちける天帝
これをあわれ身たまいいかに
あんじよあれをいかでかたす
けんやあんじよこたへて天帝御身
をわけさせたまわすバたすけ
へきみちも有べしといふさる
によつて御子ひいりよ様とわけ　／11
たもふさんかむりやといふあんじ
よ御つかいに下界に下らせた
もふあと6三じゆわん水のやくに
下らせた■■事八月中しゆんさん
たいざへるなのたいにやとらせたもふ
御ゆくと年五十三才五月中旬
に御たんじやうまします御らつ

所五十三へん一くりハ此御歳ゆへ〳〵ろ
そんのくにていおふさんぜんぜ十
すといふおふあり然は其く
にの賤のむすめに其な丸や
七才ゟがく文を心かけ十弐才　／11ウ

までに上達しわれ。つら〳〵よ
のありさまをあんするに人間
かいにうまれきてごせのたす
かりわ何とせんとおもいにひまわ
なかりし所になんち一しやうハ何と
せんやもめにてびるぜんのぎよう
をなさばすみやかにたすけ
ゑさせんとふしぎや天ゟつうけ
をかふむりはつとよろこひむすめ
丸や地にひれふしてらいはいす
此時十二へんの御らつ所となへし〳〵
かくてろそんの国のていおふハ　／12

きさきのきんみあるといへとも
ていおふ御心かないたる女なければ
くに内の丸やの事をきゝをよび
すぐにかのいゑにかろうともつか

わしかよう〳〵といふ入けれハをや
ともハかしこまり御心にまかせ申と
うけやいける然ル　といへとも丸や一ゑん
しやういんなく候故此まゝにてハさ
しをかずと無理にぬすみて丸
やをばおふの御せんにさゝけける
ていおふ見るゟ大きによろ　ひきゝ
しにまさるきりやう〳〵いらい　／12ウ

郎にしたかいくれよかしとぞ
仰ける丸やきいて御意御尤に候得共
我等事大くわんののそみあれハ身
をけがす事かつてか　わぬといふ
おふハ　きいていかなる大望もかない
ゑさする〳〵郎が妻になれかしと
いふ丸やこたゑておふハ賤ゟくら
いなくして此よばかれのゑいくわ
〳〵わづか此世ハかりのやとらいせの
たすかりかんよう〳〵といふていおう
きいて其方ハひつふに何のくらい
あるや郎ハおうのくらい〳〵いで〳〵　／13

みすへきものあるとほうぞう

ゟ取出す其品ハ金銀米銭はいふ
におよばす或ハきんだんしよくかふ
のにしき十間方のしやう〳〵びさん
ごのたまるりのかふばこめのふ。こ
はくのさいくもの。きやらやじや
かふじんかふのにをいハたまのうて
な金銀をちりばめたるてんちうに
くらし此しな〳〵も郎が心だにかない
なばみな其方にゑさすへしといふ
けれハ丸やたからにめもやらん其
しな〳〵ハいまとうざのたから〳〵
つかいつくせハむゑき〳〵さあらバ　／13ウ

われがじゆつを御めにかけんと天
にむかいてかつしやうし只今ふし
ぎをみせしめたまへと心の内に■
ねんぐわんこめらいはいすれバ天
これをつうしたまいけんやゝあつて御
膳部あたゑたまわりけりこれを
みておふをはじめ有おふ人ゝ
きいのおもいぞなしけるていおふか
さねてさて〳〵ふしぎみる事
かなほかに何そきみようを見ま

ほしくとありけれハ丸やきいてか
しこまり又〻天にむかつてきせい(一四三)　／14
きせいをかけころハ六月暑中な(一四四)
るにふしぎやにわかにそらかき
くもりゆきちら〳〵とふり出まも
なく敷尺つもりけるおふをはじめ
有合人〻ごたいもこ〻へめくちもあ
かすたゞほうぜんたるありさま〳〵此
ひまに天ゟはなくるまに打のりすく(一四五)
に　御上天ぞなされけり

羅尊國帝王死去之事

一ゆきもおやめば帝おふハゆめの
さめたるこ〻ちにて丸やハいつ
くにまいりけん丸や〳〵と　／14ウ
のたまへとも天上したるあとな
れハ尋てゆくべきやうもなし
おもいかこがれて帝おふハ御いたわし
くもついにむなしくきへたまふ(一四六)
丸やハすぐに上天し天帝の御前
に畏バ天帝御らんじびるせん丸や
いか〻してきたりし御尋丸
やきいて右のしたいを物かたれハ
天帝大きに悦たまいてさて〳〵
よくもきたりいでくらいをゑ(一四七)
させんとゆきのさんた丸やとな
つけたまいすぐにあまくだらせ　／15
たまいてもとのしゆく所にかいり(一四八)
たふをりふししよもつを御らん
あるにふしぎや御主天下せ(一四九)
たもふとあるもんじあらわれ
さて〳〵いづくに御出やとそまち
たもふあいたもなくさんかむり(一五〇)
やありかんしよをもつて天下せた(一五一)
もふびるじんさんた丸やのまへにひ
さまつき此たび御主天下せたい(一五二)
て其元のすゝしききよき
御たいを御かしあれかしといふ(一五三)
丸やこたへてさてハいつかたに　／15ウ
や■あんせし所に此方に御出
やと大きに悦すいぶん御心に
まかせ申へしとそうけあいけり(一五四)
比は二月中旬に天下せたもふ(一五五)
ゆゑよろしくたのミ奉るといふつ
たゑてぞかへりたもふすでに
二月中旬になりけれハ今や
おそしと身つゝしみてまち(一五七)
たもふ其いう暮にてうの御
よそおいにて天下せたまへて(一五八)
ひるせん丸屋の御かをうつらせた
もふころうどのさんた丸とな(一五九)(一六〇)　／16
付たまいて御くちの中にと
ひ入たもふそれゟすくに御く
わいたいとならせたもふすでに(一六一)
四ケ月もすきぬれば次第に其
身もおもくならせいざへるな
もはや月みちて。さこそ身も
ちくるしかりつらんといざひるな
かたゑそおもきたもふ又いざへる
なも丸やのくわいたいわか身に
くらべさぞや身もちふじゆう
ならんと丸屋見まいにおもむき
けるたかいにみちをゆきぬ　／16ウ

れハあへ川にてゆきやいいざ
へるなはつととびすさつて手
をつかへ曰がらさみち〳〵たもふ
丸屋に御身に御れいなし奉る
御主は御身とともにましまし
て女人の中においてまして御くわ
ほうにみじきなし又御たいな
いの御めいにてましますじすう
すハたつとくましまし丸やき
いて天にましまし我等か御をやハ
みなもたつと みたまへや身にき
たらせたもふ天においても思　／17
めすまゝに地にてもあらせた
もふ天ゟ日〻の御やしない御身丸
やのたいないゟ両方たがいのこ
とばきこしめされ御たんじやうののち
こんりきのがら さ天にましますこ
れをつくりてとなへさせたもふ〳〵又
あへ川にてつくらせたもふゆへあ
へ丸や一むすびといふ〳〵此川中にて
つもる物かたりなとなされたかい
にわかれてこそハかいりたもふ
さんた丸屋御かん難の事　／17ウ
一嘶てさんた丸屋ハすぐにわか
やにかへりけれハおやハ丸やのくわい
たいを見出大きにいかつていふよう
ハなんちハていおう。をきらいいづく
いかなるものの子をくわいたいしそ
のていたらくがてんゆかす此よし
おふにきこゑなば此おやまても
めつぼう〳〵かた時も此いゑにあし
ふみならすはや〳〵たちされと
身をふるわしてしかりけりぜ
ひなく〳〵もさんた丸やおやゝ
わかゑをあとにしてそこに　／18
たゝすみかしこにまよい或ハの
にふし山にふしよそののきばたゝ
すみてなんぎにたとへハなかり
けりようやく霜月中比へれんの
国にそまよいゆくかゝる所しき
りに大ゆきふりいたししばらく身
をバやどらんとうしうまのこやの其
間に身をちゞましてしのがせける
所にひるの八つゟぜしんのなされ
夜半比に御たんしやう則御身様こ
れなりさてかんちうゆへ御身かうら
せたもふを左右牛馬いきをつ　／18ウ
きかけ其かけにて御たいあたゝ
まりさむさをしのかせたもふ
はみおけにてうぶゆをなされ牛
馬ゟ此なさけをうけたもふゆへく
わるたの日ハぜしんちくるいちやう
るいふく用する事無用〳〵さ
て其よもあかつきになりけれ
バいゑぬしのにようぼうた 出みて
さてハかようなるむさき所に御平ざん
先わが内ゑとともないゆきて
かいらしてさま〴〵にいたわりけり
すでに三日になりけれハゆを　／19
こいたもふ其あとにて此方の
せがれも此ゆをかゝらせ候得よのた
まへハ御心付忝 ハ候得共こちのむす
子ハかさゆへにいたみ。いのちのほど
もあやうきまゝ御ゆるしなされと

いふけれハぜひにと右の湯とらす
れハ　ちまちかさわ平ようし
じゆめうのほどこそありかた
きさて八日めにも成けれハうき
よのこいやむしやうをおもいみれん
の心も出ゆへにしろくしさんの
うけたまへて御ちを■がした
まへけれハ御はゝ三た丸やこれを　／19ウ
み大きにおどろきすかりつき
てぞなきたもふしわらくあ
りてつるこのくにのていおふめん
てうめしこの国のていおふかす
はるふらんこの国ていおふば
うとざる此三人御つうげをかふ
むりて出たゝせたもふ所みち
すから段ゝに候得ともふしぎを
かふむり三ほうのみちにて　ゆ
きやい。つのりようてつれ立た
もふ其時しるへのほし　めあて
としてへれんのくにゑそつき
にけり此くにのていおふよろうて　／20
つのしはい所なれハこれに立より
尋てみんと三人ハ此所にそたち
よりて此国ゑ天ゟ御主御たん
じやうとつうげをかふむりまいり
たりおしゑたまへといふけれハよ
ろうでつきいて其さたいまだ
きゝ申さすとこたゑ又三人よ
ろうてつもともゝにおがみにま
いるへし　といふいやとよ郎ハまいる
まじまつ〳〵三人御出といふけれハ
しからハさやういたさんと三人う
ちつれたち出みれハあらしやうし　／20ウ
やめあてのほしのみゑざりけり
さて〳〵此所にたちよりしゆへなる
かなざんねんと三人一しよに天■■
かいて手をあわせ何とそひかり
をゑさせたまへとねかいけれハに
わかにみあてのじゆるへのほして
にとることくみゑけれハさて
こそといそぎけれハほとなくつき
てらい拝ある其時十三日めゝ御主
のたもふハ三人ハいつかた■よりま
いられ候やと御たつね三人こたへて
御主のしゆるしのほしを見かけ。け　／21
れハをぼゑすこゝにまいりし
といふ御主仰けるハたゞいま三人
きたるみち悪人みちゝゆへにいま
ハきへはてしゝよつて此方ゟ三つ
のみちをこしらへかへすへしと仰
けれバはつとひれふしまちけれ
バ間もなく天のつりはし三すぢ
にかゝり此三人に三すちのみちを
ゑておもふまゝわか国ゝゑ
こそハかゑりけりさてへれん
国のていおふよろうてつほん
しやひろうと弐人のかろう　／21ウ
をちかつけ曰わか国ゑ天ゟあ
るしうまれきたるよし其まゝ
おかバおつ付国もせめとらるゝへし
しかる時は郎をはじめ其方ま
てゞう〳〵たるへし此ぎいかゞと　あり
けれハ両かろうそれハいかなるもの
ならんとこたゆおふきいていや
うまれていま十四五夜もす

き。つる子ども〻といふハかろうき
いて其こがきおそるゝにた
らずそれがし。まいりてつまみ
ころさん御心やすく思召とう
ちつれていそぎゆけともみ　／22

ちしれず或ハの山川をこゑ
村〻いゑ〳〵一けんものこさずさ
がしまわりけり此事御身しらせ
たまいてさんた丸やもろともに
おちさせたもうそぜひもなし。い
づくともなくゆきすきれハ麦
つくりの大せいにゆきあいそこも
とかたゑ御たのミ申事一すち
ありわれハあとゟおつてのかゝ
るもの〻たつねきたり候わハ此麦
まくしぶんにとうり候〻と申
くれよとたのミけれハ麦つくり　／22ウ

ともいふようハたゞいまつくる麦
に此麦つくる時ぶんとわさておかし
き事かなとぞわらいける後日
此麦でけさりといふ事かくて

此所もをちゆきて又麦つくり
にゆきあいていぜんたのミしど
とくいふけれバなるほとさように
申へしと此麦つくりハうけあい
ける御主よろこびたもふ此麦
すぐに身のれかしと思召てそ
おちたもふかゝる所におつての
ものはしりきたりいかに麦つ　／23

くりのやつらともおちうと弐人
とふらさりしやといふけれハ麦つ
くりきいてなるほと此麦つくる
時ぶんにとふりしなりといふて
其麦みれハもはや色のつき
て身のりたりこれをきいて
おつてのものちからをとしてそ
れゟすぐにひきかへす弐人の
おちうとあやうき所よう〳〵
のがれさせたまへてばうちす
もふの大川にてつかせたもふ
さんじわんに御ゆきあい其方　／23ウ

ハいづくにまいるべきやとのたまへハ

さんじわんわれハ御主に御水を
さつけ奉らんため七ケ月ざき
にうまれたりとありけれハ
御主悦しかれハ此川中にて
水をさつけくれよかしとそ
ねかわせける其時ゟ御主事
じゆすきり人とそうやまいけ
るさてもきれいのめいすいかな
悪人の後世のたすけのため此水
われよかしと思召まゝに四万
余すちにわかれ其川すその水　／24

さつかりしものみなばらいそ
けらくをうけ奉るといふ事う
たがいなしそれゟたぼろといふ所
ゑつかせたもふ此時四十日め〻天
ゟでうす思召ハ何とそげかいの
御身を召よせたく　思召けれハ御
身ぢきに御上天なされ御めん
だんとげたもふ天帝くらいを
ゑさすへし御身とうやまい奉ゑ
御かんむりをわたしたまへハおし
いたゞきて天下らせたまいて本の

たぼろに御下向ありこゝにて御ほ　／24ウ

つたいなされそれゟせゝ丸やの
もりの内なるみどふに入らせ此時
五十日めゝ此日がく文はじめたもふに
さがらめんとふあまくだ　せたまい
て七日七夜の御しなんあれハ御上つ
たつにおよびぬれハ御上天そな
されける十二才まて御かぐもんを
こそなさしたまへけり

朝五ケ条の御らつ所の事

しかるに此十二年の間に御はゝ
さんた丸やそこ。こゝなるくものゑ
をとりあま川きぬをりなさ　／25

れ御身のをめしかへにそなされ
けりこゝにはらんとうといふ所
にがくじうらんといふものあり此もの
がくもんにたつし一さいきやうなどよ
みけるよし御きゝあそばし此所
にてがくもんいたさばやと思召
かのはらんどうにぞとばせた

もふ御はゝさんた丸やさま三日め
三や御尋ありてはらん堂
にて御あいなされあさこがちう
の御悦の御らつ所則此時ゝかく
てがく十らんハゆすにあがり
なむあみたふつのろ　じのめう　／25ウ

かうととなゆれハごくらくに
しやうぶつせん事うたがいなし
なととぞすゝめける御身御きゝ
ありて其めうかうをとなへしゝ
てゆくさきハいかなる所やと
こたゑたもふかく十らいふよう
しゝて四ぶんくらきといへともぐ
せいのふねにのるかいなや悪わ
ぢこくにをち善ハこくらく
にゆく事うたかいなしといふ
御身き　しめし其ごくらくハい
つくなるやと御尋又かく十ら　／26

ぐせいのふねにのるがいなやごく
らくせかいにゆく事うたかい
なしといふ御身きこしめし

だゝうたかいなしとはかりに
てハわかりかたなきゝ天地日
月人間萬もつハいかゝしてで
け候やきゝかまおしやとのた
まへばがく十らいふようハじや
くはいの身ふんにてしたな
かき申事それをなんぢハし
りてかといふ御身きこしめし
ずいぶんかたりきかせんと　／26ウ

のたまへハゆすよりおちて
かく十らん御身をうへにと
しやうじける御身のたまいける
ハ天の高さ地のふかさ八万余
ぢようほとけとおがむハ天の御
主　天帝人間のご世のたす
かりをなさしめしたもふほと
けこれゝ此ほとけ天地日月御
つくりはらいそといふごくら
く御つくり人■間萬もつみな
ありとあらゆるもの此ほとけ思
召まゝにつくらせたもふゝ又人間　／27

御さくのじぶん四ぶんのいきを入
しやうしゆするといふともいま十
ぶんのためいきなとつくがゆへに
悪ふうとなりふう来しまに
あつまり大風となりてあたを
なすすでに草木ふきからし
人たねもたへなん時天ゟ佛これを
○とめたもふ時七十五里そふきからし
さるほとに此事をきゝがく十ら
もんてい十弐人我ゝがく十らし
しやうとしやうするもかゝるいんねん
をしらんためけふからハ御身の
てしになしくだされかしと　／27ウ

ねがいけれハ御身心得ずいぶん
其方のそみにまかせすへしと
十弐人に水をさつけ師弟のやくそ
くぞなされけるしかるにてらに
まいりくん集の人ゝ我も〳〵と水
さつかりこんゑそうるをつかさど
るがく十らこれをみてわれも
でしとなりししやうとうやまい奉る
へしはた又其しよもつようだち

せずみなすてらるへきとあり
けれバがく十らいふようハこれ
ハ一切経といふ大切なるけふもん
ありなどといふてたがいに論　／28

ハ止ざりけれバ御身かさねてさ
もあらばじつ否をたゞさん此一
其方　数冊かけめためし見るへしと仰
けれハかけめを見れハ数冊かろく
壱さつハけんがくちかうておもく
かりけりこれをみてかく十らあ
らそうへきやうもなく水さつからん
とぞのぞみけるかくて学十ら
いふやうたゞいまよろうてつ御身
のぎんみつよかりけれハてらもた
ておき書物も此まゝ召をかれ水
をさつけたまわれとねかいければ
御身水を御さつけありてそれゟ　／28ウ

ろうまのくにを御心さし十弐人
のでしもろともにかのくにさして
ゆきたもふさてろうまの国にな
りぬれハ金銀ちりはめあたりも

かゝやく御堂をむすび三たゑき
れんしやの寺これゝ此てらにて人
間の後世のたすけをひろめたもふ
べれんの國よろう鉄國中吟味する事
ていおふよろうてつハ御身様の
せんぎつちをうがちそらを
かけ尋といへともあり所しれす
ゆゑいつれどみんの子ともにま
きれこみいるほともおぼつかな　／29

くとうまれ子ゟ十四才。までの
子共国中のこらずころすへしと
其かす四万四千四百四十四つたり
みなころしにぞなりけり。も
つたいなくともあれとも何に
たとゑんようもなし此事御
身つたゑきゝさてハ数万の
いのちをうしのふ事みなわれ
ゆへなれバ此後世のたすけのため
ぜゝ丸やのもりの内あらゆるく苦
げうハなされけるかゝる所にでう
すゟ数万のをさな子のいのち

うしのふ事みな其方ゆへ〻　／29ウ

しかる時ハばらいぞのけらくを
うしなわん事心もとなしよつ
て死せし子ともの後世のために
せめせいたけられいのちをくるし
め身をすてきたるへしとの
御つうげ〻はつとへいふせして
御血の汗をなかさせたまい
ひる五ケてうのおらつ所此時〻
それゟ御身ハろうまの國三た
ゑきれんじやのてらにかへらせ
何とそ悪人にくるしめられ
いのちをすてんと思召けり　／30

しかるにみてし子の内十だつ
といふ者にわかに悪心のさし
はさみしやう御身の事いま
きんみさい中なれハ御身此所
にまします事へれんのよろう
てつにそ人せば一かどのほうびの
かねにあつからんとぞたくみける
御身ハ人の心中をさとりたまへハ

これを御しりあつて此十弐人の
てし子の中に我にてきとう
ものありとのたまへハでし子き
いてさようなる心ていのもの　／30ウ

一人もこれなしと口揃ていふけ
れハ御身のたもふハあさごとに
飯にしゆるかけしよくするもの■
れにてきとうと〻とぞおふせ
けるしかるに十だつハしだいに
悪ぎやくつのりていつものとうり
しよくをしたゝめくわるたの
日のそう天ゟへれんの国にといそ
ぎゆきけれハほとなくていおふ
よろうでつにたいめんしていふ
よう當ていおふかね〳〵御尋の
あるじといふはろうまの国三た　／31

ゑきれんじやのてらのおしやう〻
はや〳〵めしとりしざいにおこないた
まへとそうつたへけるよろうてつ
きゝてなゝめならすよろこんで
ぼうびのぞみにまかすへし

とおふくのかねをつかわしける十
たつハほうびの金をうけとりて
たちかへるとふ中にてにわかに
其ざまひきかわりはなたか
くしたなかくいかゞハせんと
おもへともいたすべきようなく
ぜひなく〳〵ゑきれんしやにそ　／31ウ

たちかゑるほかのでしともよ
りあつまりさてハ十たつおの
れハしやうの事をそ人したるかふ
とゞきものそれゆへに其ざまと
口ゝ〳〵にいましむれバ十だつハめん
ほくなし御てら脇にかねをす
てゝそこなるもりのしげ身は
しり入くびくゝりてぞじめつ
せり三たゑきれんじやのてらの
わきなるかねつかといふ。のこせ
しハ此ゆへ〻

よろう鉄ゟ御身を取に来ル事　／32

さるほとにへれんの國よろうて

つハ御身をからめとらんためほん
しやひらうとに大ぜいをそへろうま
の国にそいそがせけりほとなく三
たゑきれんしやのてらにつき
けれハのがすなものともとげじ(二九六)
をなしふたへ三ゑにおつとりま
き御身ハすこし　さわぎたま
わす十たつハいつくに　といた
まへハ弟子いふようハ十だつハ
あのていに成しをでし中い　／32ウ

ましめ候得ハめんぼくなきよし
候てあれなる山中にてじめ
ついたしたり御身きこしめし
かねて身をくるしめていのち
をすて申べくゆへそ人ハ致た
りともしめつせずんハたすくべ
きにざんねんゝしかるに其山
中ハならくのそこゟほのふもへ(二九七)
あかりいぬへるのくわゑん(二九八)
とぞなりけりとりての悪人と
もに此地ごくをみせしめたま
わんためゝとり手のものこれを　／33

見て大　おど　きしかれとも■
とり手ハ御身をたかて小
手にくゝりあけもつたいな
くもろうまのくにをひきた
つる御くびにつなをかけひつ
じ引にことならすはや〳〵あ(三〇〇)
ゆめとあとゟうちたもふぬるい(三〇一)
やつめとぼうにてうちむりむ
だいにひきたて〳〵へれんの國(三〇二)
にそおつたてゆくほとなくて
いおふよろうてつがまへにひき
すゆれハよろうでつとり手　／33ウ

を見くだし先〻とりてのもの
ともごくろうゝ主とやらハ
しざいをおこのふよしつたゑきく(三〇三)
ゆだん無用たるへし其石のは
しらにくゝり付よとありけれ
ハ畏　候とおふせのとうりからめ付
ほねもくだけよとちやうちやくす(三〇四)
れハたけわみぢんになりにけり(三〇五)
御口にハにかきものからきもの
なとうちこみ御かふへにハかね(三〇六)

わのかんむりをうちこませ其(三〇七)
身ゟなかるゝちしをハたけの(三〇八)　／34

水のごとしよろうてつ　いつて
いふようは數万の子ともを殺
害せしもそいつゆへなれハ三十
三間の臺拵　かるわりやうがた
きにひきすりのぼせはり付
におこなへとひしきゆくこそ
ぜひなけれ

御主かるわ龍ケ嶽に連行奉事

こゝに三ちい嶋といふ所あり此所
にくろうすの木といふ大ぼく其
ながさ六十六間ゝ本三十三　／34ウ

間ハ又のようにのこしおき此
もとぎにてうす天下らせたま
いて火を付させ此火きゆるま
なくすゑ〳〵までもへつゝくと
いふ事此木やけしまいバ此せかい
天火地火一どにわがふして三時
のあいたにやけめつするといふ

事をそろしきかなおそるへし〳〵
かくてすへ三十三間をきり取
はり付のだいに拵これを御身
の肩にからけ付かるわ龍ケ
嶽へぞおつたてけるしかる所に　／35

みちにてべろうにかといふ水
くみにゆきあい此もの御身に
あわれをくわへ御いたわしやと
御血の汗をぬぐいて水をさし上
御身いたゞき悦てのミたもふいか
なるものか忝　一どハたすけゑさす
べしさて其手のぐいに御すかた
うつりけれハ水くみも忽躰なく
とてさんたゑきれんじやのてらに
ぞおさめけるしかるに御主をか
るわりやうか嶽にそひきのほす
るこゞにしざいにきわまり　／35ウ

たる科人弐人あり其まん中
御主の御手あしを大釘にて
うち付弐人のざい人左右に搦付
ておし立　左りのざい人いふやう

いままてしをきさま〳〵おふく
といゑともかゞるむごきしをき
未見ずこれみな御主ゆへなり
と恨ミごと右のざい人きゞてそ
れハそのほうの心得ちがいゞわれ〳〵
こそだいざい人〻御身ハ何の
とかかもなくして此しをきハ
御いたわしくこそ候〻といふ抑　／36

此科人のゆらいをくわしく尋る
に御主御たんしやうのおり始湯を
とらせたもふ其あとにてゆを
かゞりしかさ子〻其せつすでに
いのちもたへなんばかりの悪がさ
しやうじけるふしぎに湯にて
かさたちまち平養し然ると
いゑとも此ものせい長の後悪
しんとなりついに死ざいにき
わまり御主御才どのせつ御身
とともにくるうすにかゞり御
供せしもいんねんゞ　／36ウ

もうもく金に目のくるゞ已来の事

一かるわりやうケ嶽において入かわ
りたちかわり日ゞ〳〵かうもん　此
事四十六人みでしつたへてこれ
をかなしみさま〴〵にくぎやう
をなしあるいハしよくをたち
しにをかろんじて御供せんと
あらゆるくきやうハなしにけり御
身此事御さつしありて御ばつ
しよのおらつ所をつくりたまいけり
かさねてよろうてついふけるハやく
人と　はやくいきのねとめよと　／37

ありけれハかしこまりて役人
ともぬき身を手にもちはたら
けとも五躰もなへ手あしもかな
わずつくへきようハなかり
けりかゞる所にもうもくきたり
けれバいかに亡目此所にはたもの
ありとめをさゞハかねを遣へし
くいかに〳〵といふけれバ盲人きゞ
ておしゑたまハばとめささん
といふけいどのさむらいこれかう〳〵
とねん比におしゆれハ心得たりと

おしゑのまゝくつとさしとうせ　／37ウ
ハ血汐流てめに入バふしぎや
両眼くハつとひらききめう〳〵
さて〳〵此せかいあきらかゝま
そつとはやく悪人のとめを
さゝバもちつとも此目かはや〳〵
あかふものと申ける此時御身
もうもくハ後世のたすかり
あるましくとそ仰ける此もう
もくおもふまゝにとめ　さし
ほうびのかねをとりけれハま
のこつぶれて忽にもとのご　／38
どくになりにけりかねゆゑ
目のくれる事此ゆへゝ左右とか人
もろともに無常のけむりと
きへうせけりしかる　いゑとも右の
ざい人ハ忝も御身の御供して
御上天いたしけりかなしいかなや
左りの壱人ハいぬべるのにそしづゝ
けりしかるにはゝのさんた丸屋
御身のしがいを見たまゑてな
げきたもふぞとうりゝ帝王
よろうでつ此よしをみてあ
れなる所になげきしとう女　／38ウ
ありいかなるものとありけれハ
かれハはたものにかゝりし御身
の母にて候と取つぎけれハ帝王
きゝて左有へきはすゝ親子の
わかれに名残おしまする　へしと
ありけれバ母ハうれしくしがい
にひつしと抱付てなげきたもふ
そいたわしくかくてハつきし
とけいどのもの石のひつにし
がいを納大地にうつみ昼夜
の番ぞ付をきけり　／39

きりんとの事

一せすたの日御身大地のそこに
くだ　せたまいさバとの日まて
御とうりやうましまして御官
の上　ましますをあまたの御弟子
これをおかむそれより天に
のぼらせたまい三日目に御親天
帝の御右ざにそなわらせたまい
それゟいきたる人しゝたる人た
すけたまわんがためあまくだ　せ
たまいてさんたゑきれんじや　／39ウ
のてらにましますゆうご
かてうのいわい日此時ゝ御弟子
かしらハつぱといふ人御くりき
の御門迄御向に出させたまい此
所に四十日の御とうりやうましまして
後世のたすかりぞおしへたもふ
あぼうすとろ十日の間御だん
ぎ五十日目に御上天そなされけり
御はゝ丸や天ゟ御つうけをかふむり
七月三日おりべてといふ山ゟ御
上天そなされけりしかるに天に　／40
て御母御とりつきのやく御身
ハたすての役御親天帝はあ
てる御身ハ御子ひいりよ御母ハ
すへるとさんとなり天帝三躰
にならせたもふ　尤三躰といへとも

本御一躰にてましますといふ事

御身後世助始てなさしめたもふ事

さるほとに先年よろうてつ
にころされし數万のおさな
子ころてるにまよいいるを　／40ウ

御身名をさつけたまいてば
らいぞにひき上けたまいけりさ
て御たんじやうのせつのやとぬし
をはじめ三ケ國のていおふ三人
御弟子のこらすのちの麦つくり
水汲のへろうにかみな〳〵御上
天そさせたまふみな一同に
はらいぞへめしくわへらるゝと
いふ事御母丸や天帝にむか
いのたまいけるハ我等事ひるじん
のぎやうをなしゆへにわれと
したゑてこかれしぬかりのお　／41

つとにたておけハ何とぞ此
もの御たすけたまれかしと
ねがいけれバ則御たすけあり
て夫婦となしくらいをあ
たへせ御身にぜじうすとな
らせたまふ又水くみのへろう
にかハあねいすてらとくらい
をうけ此世のくりきとまも
らせたもふといふ事

役〻を極させ給ふ事　／41ウ

三みぎりハ天びんの御役をかふ
むりしゆりしやれんとふにて
とがの次第を御たゝしありて
ぜん人ハばらいそへとうし悪人ハ
いんへるのにおとし又科の次第〳〵
にてはつかしくとがをいま
しめたもふ事〻たとゑぜん
あるものといふとも天ぐこ
れをとらんとする三みぎり
これをくれじとばんのしうけんを
もつて天ぐをさくるふるか　／42

とふりやゑとうしたもふといふ
事此時たつしたるかうくわいす
るにおいてハいぬへるのをのかし
たもふ〻又人をがいするかじめ
つしけるものハ此所にてあらた
め出されいぬへりのにをとさ
れまつ世まてたすからさると
つゝしむへし

一三へいとろはらいその御門の御役
此所にてもんとうひらきの御らつ
所をつとめとふるへき所〻　／42ウ

一三はうろ善悪の御吟味御
たゞし善なき人ハふるかとう
りやにとうしとかのおもきか
るきにゑ三時のあいたゑ三十三
年までのきうめいをうけ其
のち三しゆわん御あらためにて
あぼうすとろ御ゆるしをうけ
さんとうす御取つきを以速に
ばいらいそのけらくを請奉る

此世界過乱之事　／43

一此世界めつきやくにおよふ時
ハ大日大かせ大あめむしなと
あるいハさま〳〵けだい七年の間
かわりなく〻かるかゆへにしよく
もつ大にたらずにしてう
とくの人のしよくもつなともむ
だいに奪取これをしよくしすで
にどしぐいのことくなるものといふ
事其時天ぐきたりてま
さんこのミをさま〳〵にへんじさせ
これをくわせわかてにつけん　／43ウ

とたくむこれをしよくした
る人ハ天ぐの手したとなりて
みないぬへりのにおつるといふ
事又七年もたちて三
年のあいた田ばたハもちろん
よもの山〻までよくみのりて
だいほう年いうらんのミよ
〻此せつ悪をすて善に
なづきてきたるべしたす
けゑさせんとの事〻又三
年もたちけれハ天日地火

一とにわかふし三ち嶋のくろう　／44

すの木もへきれしを水ハあ
ぶらとなりてもへのほりくさ
木ハしみのこどし十二ヶ所ゟ火ゑん
ほのふともへのほるこそすさ
ましくこれをみてちくるい
てうるいしやうあるもの人間
にふくせられたすかりなん
とぞさけびけるといふ事次
第にほのふやけのぼる三時
のあいだにやけしまいてそ
めつしけり其やけあとひ
た一めんのしらすなとなり　／44ウ

其時三とうすとろんのかい
をふきたてたまへハ御さく
の人間まへ〳〵ゟしゝたるもの
いま又やけしせしもののこ
らずこゝにあらわれいで
此時てうすはかりなき御
ちからをもつてあにまも
とのしき身によみかやらせ

たもふといふ事
評に　曰此時にゆきまようあ
にまあるといふ事何ゆへかと
尋に此かいにてさいごの時　／45

火菀におふたるもののあ
にま〻まつせまてまよう
てうかぶ事これなしといふ
事〻たとへどそう又ハ水
そうにてしがいをちくる
いてうるいきよるいにくわ
るゝといへともやけめつしたる
時ハそれ〳〵にもとのごとく
にまいるへしといふ事人間
にふくせられしし身ハ
又〻きたらざる〻此ゆへを　／45ウ

もつてみいらのくすりのま
ざる〻
かくて天帝ハ大きなるごい
かう御いせいをもつてあま
くだらせたまいてみちを
御踏わけ御はんをうけし

もの三時の間に御ゑらめ右(三九〇)
左りとわけさせたもふかな
しいかなや左りのものばう
ちすまうさつからざるゆへ
天ぐとともにへんぼうといふ地　／46

ごくにそおちけれハ御ふう封
いんぞ(三九一)なされけり此所にをち印
たるものハまつ代うからす(ママ)
といふ事又ばうちすもふさ
つかりし右のものハてうすの
御ともしてみなはらいぞへま
いりけるはらいぞにてぜん悪の○
多少を御あらためありてそれ
それのくらいそかふむりけり
此所にてふつたいをうけ(三九二)
まつせまつだいしよう。し(三九三)　／46ウ

ざいゑてあんらくのくらし
をするこそたのもしきあん
めいぜすゝ(三九四)
こゝに弐人のほうばい(三九五)有其
中むつましき事たとへか

たなししかるに壱人いふよう(三九六)
其ほうわれゟはやくしゝた
まわハらいせの事つふさにつう
けたまへわれ又さきにしすれ
ハ三日の内つうくるへしとた(三九七)
がいやくそくいたしけりしか　／47

るに一人ほとなくしにけれハ
のこり一人大きにかなしみ天
にさけび地にまろびなげ(三九八)
きかなしめとも其かいなく
すでに三日三やもなりぬ
れバしらせのほどそまちに
けり三年もたちぬれとも
何のたよりもなかりけれバ　のミ
もつなもきれはてこがれ
しなんとする所に三年の三月
めにきたりけれハ悦事かぎ(よろこふ)
りなしいかゝしておそか　／47ウ

りしといゑハたちかへりたる人
いふようハかたときのいとまも
ないといふ其めんていつねに(三九九)

かわりあぎのしたにひあるを(四〇〇)
みていかゞと尋けれハ此火(たつね)(ひ)
すなはちふるかとうりやの
火〻といふいきのこりたる一人
きいていふようハさあらハ其
火をわれにたまわれわかと
かをいま此よにてやきめつし
とも〳〵に此世をたちさりなん(よ)
といへハいやとよ此火のあたゝ　／48

かさ此世の火の十はい〻な(四〇一)(よ)
がくかからへかたきといふくるし(こ)
からずぜひ〳〵とありけれハし
からハのそみにまかすへしと
ありおふかく木をつゝたて〳〵(き)
其中につゝこませめいどの
火をハつけけれハほのうしき(四〇二)(四〇三)
りにやけのぼりたちまち(ママ)
からだやけうせてすぐに
天のみちをゑてはらいぞ
の御人數にそくわゝりけり(す)　／48ウ

三とうす様と申奉ハすなは

ち此一人〳〵(四四)いま一人の御方の
御名分妙(なふんみやう)(四五)ならさるゆへりや
くするもの〳〵　／49

裏表紙　白紙　／49ウ

四　あとがき

この稿は、昨四十三年十一月にキリシタン文化研究会（於麹町会館）にて「天地始之事解題」と題して発表した時に資料として用いたものである。尚、その折、同研究会の先学諸賢より、数多くのご教示を賜わった。就中、長崎のディエゴ・パチェコ師よりは、非常に貴重なご示唆をいただいた。（同師は四十三年十月、同研究会長崎部会で「かくれきりしたんの秘書『天地始まり』のこと」の研究発表をなされた由）。謹んで学恩に深謝する次第である。又、本学友松滋夫教授には、マイクロポジフィルムの現像方の労をわづらわせ、同熊谷武至教授には、文字の判読に協力を惜しまれなかった。併せて御礼申しあげる。

尚、この研究は、昭和四十二年度文部省学術研究奨励助成金による研究成果の一部である。

（44・4・7）